

美意識の深底より見たる光及び暗

植 田 壽 藏

上

例へば或る花を美しいと見る、若くは、美術作品を好しと見るのは、その花として、若くは、作品としての意味、視覺の意味が自ら意味することであると吾々は思ふ。實に如何なる視覺上の事實も、この意味の根據に立つて初めて認められるであらう。如何なる見ることの事實にも先立つて、『見ること』の意味が存在しなければならぬ。素より、かく思ふ吾々は、吾々に投懸けられる一つの反問を見ること、即ち、視覺性な意味が、初めに存在すると言ふことは、何に據つて證據立てられるのであるかと言ふ問ひを豫想する。單にその意味が初めに存在するとのみ言ふのは、獨斷であると言はれるかも知らない。けれども夫れは誤解であらう。獨斷と言ふのは、不可知なるものゝ存在を、正當なる根據なしに主張することを言ふのであらう。目が物を見るときは、然し、最も明白な事實であらう。事實は然し、何等かの根據の上に立たねばならない。事實があると言ふことは、夫れ自身、かゝる事實がなければならなかつたこ

とを證據立てるのである。目が物を見ると言ふ事實、視覺上の一つの事實は、視覺性と
 と言ふ一つの特殊なる限定、若くは『意味』に據らねばならない。けれども、何故に、第
 二の問ひが言ふかも知れない、夫れ故に、意味が事實の根據でなければならぬので
 あるか、何故に意味が先行性（プリオリタテ）を持たねばならないのであるか。

けれども、吾々の正しき進程を辿る思考が、かく考へるより外に考へ方を持つであ
 らうか。意味が事實に先行するとは、一つの事實が、その特殊なる事實として成立す
 ると言ふことが、その一事實を決定してゐると言ふことである。一つの事實は、一つ
 の特殊なる限定である。かゝる事實の限定には、かゝる限定の有り得ることが先立
 たねばならない。成立するとは、何等かの意味あるものが成立することである。如
 何なる意味に於ても無意味なるものゝ成立を考へることは出来ない。けれども、次
 の疑ふ人が、意味の限定が先づあつて、事實が、後より之れに従ふのではない、事實は直
 接に事實として生起するのである、意味の如きは却て後に考へ加へられるのである
 と言ふかも知れない。吾々は、今意味が概念として意識せられる心理的過程の如き
 ことを論じてゐるのではない。事實が如何に直接であるにはしても、有るべからざ
 る事實が有ることは出来ない、事實は常に有り得べき事實でなければならぬ。意

味が事實に先行するとは、實に、一つの事實には、かゝる事實の有るべきことが先立つことを言ふのである。事實と成つて實現せんとする必然なる傾向である。事實への深き意志である。かゝる意味に於ての、事實の根源である。意味は事實の必然的なる豫想である。事實を豫想するものではなくて、事實が豫想する外か無いものである。先行性は、かくして意味のアプリオリである。

吾々が一つの青い花を見るのは、その青い一つの花としての意味が、吾々の目に於て、事實と成て現れるのである。寧ろ、その青い花としての一つの意味が自ら意味すること、夫れがその時、吾々の目が、問題の一つの特殊なる花としての、色及び形を見ることが言ふことなのである。

夫れ故に、意味が自ら意味するとは、鑄型が溶かされた鐵を受入れる様に、『青い花』と言ふ意味の形式に、或る物的の内容が盛られると言ふ様なことではない。麥粉に混ぜられた麵包種の様には、意味が物質の要素と成て、一つの青い花と成るのでもない。唯だ、その青い花と言ふ名によつて呼ばれる様な、一つの視覺的意味が自ら意味すること、そのことが、青い花を見ると言ふことであり、青い花が見えることであり、在るこ

とであり、青い花の意味が實現することである。これを明白にしない故に、意味が實現すると言ふ考へが、多くの性急な批難を浴びるのである。一方に先験的なる意味を考へ、他方に物的存在を考へて、その關係を懸念するのは立場の混淆である。

如何なる物質を考へるにはしても、この物質が直ちに一つの青い花ではない。青い花とは、どこまでも、目に見える青色の形體である。視覺の對象である。同様に、青い繪具もまだ青い花ではない。畫家が筆を取つて、青い繪具を塗る過程そのものも、まだ青い花ではない。青い花を畫かうとする人の、意識的なる意志そのものも、青い花ではない。花はこの執意によつて成立するのではない、却て、之れに先在するのである。唯だ漫然と執意せられて、漫然と塗られるのではない、青い花を畫かうと思ひ立つ、又それを畫くのである。凡ての前に、意味が先行するのである。個人の意識なくして意味の現れはない。然し、個人の意識作用なる鑄型の中に、意味なる鐵が入れるのではない。意味が直ちに意識と成るのである。意味の自ら意味すること、即ち、個人が意識することである、意味は意識の本質である。意味の根柢なくして意識なるものを考へることは出来ない。如何なる外部的なるものが、意識を規定すると考へては、見ても必ずその前に、若くは底に、意識の成立の可能性が豫想せられね

ばならない。意味が自ら意味するとは、一つの意味が、その意味として、無限の持続性を持つことである。意味はかくして、如何なる意識にも先行するのである。之を不可能と考へるのは、意味を唯だ一つの意識内容とのみ見るからである。意味が個人に意識せられる事實、單なる心理上の過程を、意味そのものと誤り考へるからである。意識以前の個人意識を考へて、意味の名を冠せんとするからである。意味はどこまでも、個人意識以前に成立し、無限に存続し、さうして個人意識に現れるのである。個人意識が意味を限定するではない、意味こそ夫れを生む。否、寧ろ、意味が自ら意味するのみである。夫れが、個人が、或るものを意識することである。意味は個人の意識以外に現れ方は無いのである。

また疑ひが起るかも知れない。意味するとは意識することであり、意味は個人の意識以外に現れないならば、個人意識に入らない限り、意味は存在は中斷せられるではないか。けれども、この問ひは、個人意識に入らない意味を如何にして考へ得るかと言ふ問ひを投げ返すことによつて、自から撤回せられるであらう。個人意識に入らないことが問題と成る意味は、必ず何等かの意味でなければならぬ。さうして夫れが問題と成る以上、意味は確かに意識せられてゐるのである。例へば、遠い世界

の果てに、何人からも見られずに咲く一つの花を考へるのは、彼が心の野の『果て』に、さう言ふ花を咲かせて見ることである。斯かる疑問は、まだ、物體が吾々の知覺と獨立に外界に存在すると言ふ様な考へ方から脱しない、謂ゆる素朴なる人々が、意味が、彼等の考へる石塊で、いもある様に、外界に存在するものゝ如く、獨斷するからである。

夫れならば、第二の間ひが言ふでもあらう、一つの花を見る、さうして幾時間かの後に、復たその花を見る、その花を二度見たと言ふことは、その花の意味に就ては如何なることを語るのであるか、その中間に插まれた幾時間かの間に於て、その花の意味は、存在するのであるか、しないのであるか。けれども吾々は、この疑ひに對しても、亦、左の如く問ひ返すべきである。その中間に插まれた時間は、如何にして考へられるのであるか、その間隔が考へられるのは、一つの花が二度見られたと言ふことが意識せられるからであらう。第二の意識に、第一の意識の記憶が結付けられると考へられるからであらう。一つの花を見て、嘗て、即ち數時間前に、この花を見たと言ふこと、再認感情が結び付くからであらう。けれども、かゝる再認の意識は、現在の意識ではないか。凡ての過去の意識は、現在の意識である。のみならず、一つの花を見て、嘗て此花を見たと言ふ再認の意識は、花そのものゝ意識ではない。再認の意識が如何に

伴ふにはしても、花は唯だ現在意識せられるのみである。嘗て此花を見たと言ふのは、この花の意識を、即ち、その花としての一つの意味の現れを、謂ゆる過去に打擴げやうとするのである。けれども過去は既に過ぎた。直接經驗の世界には過去と言ふ領域は無い。時間は(過去をその中に含んで)單なる時間ではなく、何ものか、意味の持つべき時間である。無意味なる意識が考へ得られない様に、無意味なる時間なるものは無い。一つの花を見ない中間を考へるのは、その花に就ての無意味なる時間を考へるのである。さうして夫れは誤りである。

時間は意味の形式である。意味が意識に現れる、その形式が時間である。故に又意識の形式である。一つの花を見たことを過去に打擴げると言ふのは、現に見る花の『以前』を擱まうとすることである。直接なる花の意識の背後を反省することである。そこには、然し、謂ゆる『過去』の空間に、嘗て見た花の形と色が、印畫の様に焼き付けられてゐるのではなくて、唯だ、その花の意味が無限なる意味が先在するのみである。一つの花を見ない時があるとは、問題の一つの花を見たものゝみ言ひ得ることである。さうして夫れを言ふことそのことが、意味が無限に存續することを證據立てるのである。重ねて言ふが、意味と言ふ名の個人意識が、時間に於て存在する

と言ふのではない、唯だ、先きに言ふ先行性としての意味が、無限に存続することを言ふのである。物の過去とは、實にその意味の先行性が、外界に投射して考へられたのである。一つの意味が意識せられない時間なるものを考へて、その間に於ける意味の存在を疑ふのは、二重の誤りに陥るからである。第一に、時間を、實に唯だ『考へられた時間』を、謂はゞ空間化して、謂ゆる過去を、白き道の如く現在の背後に横へ様とするからである。第二に、意味を、物體の如く、時間に於て存在するものと考へるからである。意味は確かに、意識に現れる時に於て時間的である。けれども意識以前の意味は、意識を超越する如く時間を超越することを明覺しなければならぬ。時間は意味の形式に過ぎない。意味が時間を含むのである、時間が意味を含むのではない。意味は唯だ意識の、それなくしては意識の成立を考へ得ない、先驗的なる豫想である。意識の意識性である。

意識の意識性、私は、然し、かゝる言葉を避けることによつて、コオヘンが、彼れの思想の重要な部分に於て、同じ言葉で言ひ表はした異なる意味に、私の意味を混せられる嫌ひから遠かるべきであつたかも知れない。意識性は意識ではないと言ふ點に於ては相似た考へではあるが、私の考へる意識と意味を區別するものは、彼れのものと

は相覆はない、しかもその差別を、私は重要視するからである。即ち、コオヘンによれば、意識を意識性から區別するものは、意識の内容である。意識性とは、單に或る意識があると言ふ事實を表はすのみであり、未だ意識の内容を表はすには至らない。之に對して意識は内容の意識であり、内容の意識は、常に唯だ感覺の内容である。然し、一つの感覺は、まだ眞に内容と言ふべきものではない。内容は感覺の關係中に、即ち多様な感覺の統一に於て成立する。かゝる多様な統一は、即ち内容の意識は、單一なる感覺ではなくて、思惟の産出である。(Cohen, *Ästhetik des reinen Gefühls*, Bd. I, S. 136—136; *Kants Begründung der Aesthetik*, 155—6) コオヘンの言ふ單一なる感覺が意識内容と言ふべきものでないとするれば、如何なる程度に、若くは意味に、意識的なるものであるかは、彼れの感覺論によつては、私には十分明白でない。若し夫れが、吾々の解する様なものとするれば、例へば、不用意に紙に落された一滴の繪具の如きは、(芝地を覆ふ單調な綠色や、ワイオリンの一つの音などゝ共に)彼れの言ふ單一なる感覺に屬するものであらう。故に又夫れはまだ意識内容と言ふべきものではないであらう。吾々に取つては、然し、かゝる單一な、怖く亂雜な形を持つに過ぎない色彩の一點も、尙ほ明かに一つの意識内容であり、かゝる形を持つ色としての一つの視覺的意味の、視覺

としての意識性の現れなのである。

意味とはその様なものであるが、然らば、意味は如何にして意識と成るか、意味に何ものゝ加はることが、意識が成立することであるかと、私は、反問を受けるかも知れない。之に對する答は然し最も簡單である。意味の自ら意味することが、一つの意味が意識せられることである。意味は意味する、意味せざる意味なるものは無い。一つの花と言ふべき意味は、その花以外の如何なるものでもあることは出来ない。同時に然し、目に見えぬ一つの花なるものは無い。その花が目に見えるのは、その花としての、さうして如何なる他の花としてゝもない、視覺的意味が、獨り自ら意味するからである。如何なる事變を之に附加へても、結局夫れは、この花が意識せられることではないであらう。意識以前の意味と言ふのは、一つの意味の意識以前に、意味と言ふ一種の知覺的存在を考へるのではない、意識の意識性を言ふのみである。意味が自ら意味する以前に於ける、決して時間的以前に於ける、意識なるものは無いのである。

意味が意味するとは、その意味が意識せられることであり、同時に、意識作用そのものであり、意識せられる對象そのものゝ存立である。

勿論、意味が意味すると言ふのは、直ちに、意味を知ることと言ふのではない、或る種の意識内容の間に於ける包攝關係の成立を言ふのではない。意味は如何なる意識内にも先立つ、實に、知識の據て立つ意識内容そのものを生起せしめる意識性である。固より、夫れ故に、意味は、その意味を知る智識と無關係ではない。智識は意識内容の上に立ち、意識内容は意味の上に立つ、意味は智識の深き根抵である。意味は意味する。意味せざる時のある如き意味を考へることは出来ない。即ち、意味は、その意味に於ける無限の相を内に含んで、永久に現れて已まざる意識性である。意味が意味するとは、その意味を含んで、しかも各々特殊なる意識内容として意識せられねばならない。意識せられるには、然し、意識するもの、即ち、意識内容の背後に立つて之を見るもの、即ち、主觀が無ければならない。主觀とは、單なる個人ではなくて、意識内容を見るもの、深き無意識である、眠れる人を言ふのではない、意味の底なる深き意志である。

意味する意味は、單なる意識内容ではなくて、同時に、夫れを見るものである。夫れ故、意識内容を見るとは、その半面に、その意識内容そのものによつて、夫れの背後に立つものを意識することの可能を豫想する。意味は、この可能を含むことによつて、意

識内容の面にて、自己の影を見る。之を主觀の立場より言へば、主觀が自己を反省することであり、意識内容そのものから言へば、意味を知ること、意味を對象化することである。心理的には、意識内容そのものに含まれる或る表象を、殆ど表象することも出来ない、恰も、文章に對する間投詞の如き、單なる表象への緊張を切出すことであり、論理的には、一般的なる概念を見出すことである。茲に言ふ含まれるとは、反映すること、包攝することであり、包攝するものは、より高きものゝ一般的なるものである。概念の意識は、かくして、意味の對象化、意味の反省である。この對象化せられた意味が、具體的なる表象を主語とする判断の述語である。かゝる述語を切出すことが、知ることである。知るとは意味の意識性を除いて、言はゞ『唯だ、意味の影』のみを見ることである。

一つの意味は、右に言つた様に、意味する點に於て、その一意味としての無限の持續性を持つのであるが、然し、一つの特殊なる意味として、夫れは一つの限定である。意味が無限に存在するとは、かゝる一つの限定性の無限なることを言ふのである。意味せざる時のある意味なるものを考へることは出来ない。即ち、意味は、その意味と

して、無限に存在することを深く自ら主張する。即ち意味は、特殊なる一つのものとして限定することの意志である。意志するとは、何ものか意味を意志することであり、意味するとは意味が自ら意志することである。意志せざる意味は無い。意志とは然し、單に、普通に心理學者が言ふ様な意識的なる意志ではない。否、その根抵である。一切の意味、意識の深底である。

實に、自らは、如何なるものからも限定せられない、唯だ他を限定するものが茲に言ふ意志である。他と言ふも、意志を離れて獨立に他があるのではない。意志が意志する故に成立し來るもの、即ち、意味である。意味とは意志の一面である、意味としての姿である。如何なる意味にも意志の根抵がある。意志を豫想せざる意味を考へるのは、自ら存在を主張せざる意味、意味せざる意味を考へるのである。意志の自ら意志することが、一つの意味が自ら意味することなのである。然らば意志も、又、單に一つの意味に過ぎないものであると考へられるかも知れない。けれども夫れは誤解である。意志は、凡ゆる意味の先驗的な豫想であり、しかも自らは、何ものをも豫想しないのである。意志を若し一つの意味と見れば、意志は、その一つの特特殊なる意味として、無限に自己を限定することを意志しなければならぬ。けれども、意志を豫

想する意志、意志の意志と言ふが如きは無意義である。

一つの意味の背後に、若くは内に、かゝる意志を考へる必要は無い。意味は自ら意味すると言へば良いと言はれるかも知れない。けれども夫れは、意味の眞義を知らないからである。意味の自立を考へながら、その根抵に自立の意志を考へ及ばないのは不徹底である。意味の根抵に意志を豫想することなしに、如何にして無限に多様な意味の成立を説明し得るか。一つの意味 A と之に異なる意味 B の成立を如何にして説明するか。單に偶然に成立したと考へない限り、必ず何等かの根拠を豫想しなければならぬ。偶然と言ふのも既に一つの豫想である、さうして實に、意味の自立を全く否定する如き豫想である。

意志を豫想せざる意味は無く、しかも斯くして豫想せられる意志の底には、何もものも豫想することは出来ない。意味の底には唯だ無限なる意志のみが考へられる外は無いのである。意志は、かくして、如何なる限られた意味でもあることは出来ない、言はゞ凡ゆる影を宿してしかもその何もものでもない鏡の如きものでなければならぬ。

然し、尙ほ、疑ふ人もあるかも知れない、その様な無限の意志が、如何にして或る種の、

限定せられた意味を生むのであるか。確かに之れを明かにするのは、吾々に取つても重要である。けれども、吾々は之に答へて、夫れは唯だ意志のアプリオリによると言ふ外は無^い筈である。實に如何なる意味と雖も、意志がそのアプリオリに據つて意志する故に成立するのである。意志するとは何ものかを意志することではなければならぬ。意志とは意味を限定することである。意味の成立が否定せられない限り、意味は意志の根據の上に成立する外は無^いのである。

吾々は、今や、單に一つの意味のみでなく、無限に多様なる意味が、凡てこの無限の意志によつて限定せられることに就ては、多言を省略することが出來ないであらうか。之に反して、凡ての意味を限定するものが、かゝる無限の意志であることが出來ないことも考へ得るか。即ち或る意味は或る意志を豫想し、或る他の意味は他の意志を豫想することも考へ得るか。意志を單なる個人の意志作用でも考へない限り、吾々は意志の種類を考へることは出來ない。異なる意味を持つ意志の意味の根抵に考へるのは、一つの特^殊なる意味によつて限定せられる意味を考へるのは、矛盾である。

凡ゆる意味は、唯だ無限なる一つの意志の創造である。けれども夫れは當然であ

る。意志は意志する。意志せざる意志を考へることは出来ない。意志せざる時のある様な意志を考へることは出来ない。然し、意志するとは、右に言ふ様に、意味を限定することである。一つの意味を、そのアプリアリによつて限定する意志は、更にそのアプリアリによつて、第二の意味を、故に又無限に多様な意味を限定しなければならぬ。意志が意味を限定しない時を考へるのは、意志が意志せざる時を考へるのである。意志を根據に持たない意味を考へ得ない様に、意味を創造せざる意志を考へることは不可能である。意志せざる意志を考へることは不可能である。

下

吾々が物を見るのは、右に言つた様に、視覚の意味が意味することであるとすれば、目によつて物を見るとは如何なることであるか。目は視覚の意味に對して如何なる關係を持つのであるか。吾々が物を見るには、目を開かねばならない。目を措て、如何なる身體の部分も物を見ることは出来ない。同時に、然し、吾々は物を見る吾が目を見ることは出来ない。見るものは、唯だ、目によつて見られた外界のみである。確かに、吾々は、目の存在を意識するとは言へる。強く物を見詰める場合、目の周邊に緊張感覺を経験する。けれども夫れは、目を見ることではない。それが眼球その他

を動かす筋肉の緊張であると言ふことは、單に後から附加へられた知識である。鏡に映して吾が目を見ると考へられるかも知れないが、夫れは唯だ、吾が目によつて見られた『目』であつて、その『目』が物を見るのではない。吾々は鏡の面に、或る色と形を、目と言ふ名によつて呼ばれる視覺的對象を見る。けれども吾々が物を見るのは、この色と形が作用するのではない。作用する目は、即ち眞の目は、見られるものではなくて唯だ見るのみである。見るとは外界を見るのである。色と形を表象するのである。視覺の意味が自ら意味するのである。直接經驗の事實からすれば、彼れの目が作用する時、彼れの目は、言はゞ彼には存在しないのである。

目があればこそ見えるのであると吾々は普通に考へる。確かに夫れは事實であらう。唯だ夫れを言ふには、言葉の意味を明かにしなければならぬ。目が物を見ると言つても、生理學者の考へる目の個々の部分が見るのではない、それ等の部分の何ものゝ中にも、視覺は隠されてゐるのではなく、唯だ目の全體が物を見ると言ふ外は無いのであるが、視力は、然し、目の全體の中に、花が香を包むと言ふ様に、隠されてゐるのではない。目の物體の、個々の部分に考へられる、生理學的、化學的變化、即ち物を見ることではない。夫れは唯だ視覺作用が、夫等の立場から説明せられた、言

は、翻譯せられたものである。之等の科學的立場から見られた視覺性が肉眼である。目が物を見る力を持つと考へられるのであるが、物を見る作用そのものを外にして、別に目と言ふものが存在するのではない。この意味を明覺しない限り、目がある故に物が見えると思へるのは、立場の混淆であり、本末の顛倒である。視覺的意味が意味する故に、初めて目なるものも考へられるのである。視覺作用が物質的な肉眼に外から附加はるのではない、視覺作用そのものが肉眼として考へられるのである。

目がこの様なものであるとすれば、目を閉ぢるとは如何なることであるか。目を閉ぢて何ものをも見ることは出来ない。視覺そのものが目であると言ふならば、目を閉ぢるとは視覺が如何に成ることであるか。けれども、吾々は先づ問はねばならない、目を閉ぢるとは、生理學的に見て如何なることであるか。目を閉ぢるとは、上下の眼瞼が引寄せられて、角膜の外面が覆はれることであらう。けれども、かゝる眼瞼は、嚴密なる意味に於ての『見る目』ではない。眼瞼が目を覆ふのは、風に翻る袂が目を遮ると等しく、視覺作用の姿としての目に取つては、單に外的なる障害である。視覺性そのものゝ作用が消滅するのではない。目を閉ぢるのは盲目と成ることでは

ない。

盲目と成ることによつては、夫れならば、眠ること、及び死ぬることによると共に、視覚は消滅すると考ふべきであるか。けれども夫れは、唯だ、視覚は作用しない時があると言ふ有り勝な、さうして、吾々が既に否定の形に於て答へた、一つの疑ひを喚びそゝる外、目がある故に、視力が作用すると言ふ素朴的なる考へを保證するには、役立たないであらう。

けれども、盲目と成ることによつて、少くとも目を閉ぢることによつて、吾々は果して、何ものをも見ないであらうか。確かに、肉眼を閉ぢると共に、凡ゆる知覚表象に代つて、暗が吾々の視界を閉ぢ籠める。然し、同時に、その暗を視野には、一種の視覚的表象が現れることを見逃すべきであらうか。それ等の内部的表象は、殆ど、色と輪廓を缺く、朦朧たる表象に過ぎない、言はゞ唯だ、表象への緊張とでも言ふに相應はしいものではあるが、尙ほ、その本質に於て、明かに視覚的なる表象である。目を閉ぢて或る風景を思ひ浮べると、耳を外界に絶つて、或る音楽を思ひ浮べるとは、均しく、暗く朦朧たる内部的表象ではあるが、然し、一つはどこまでも視覚的であり、一つは聽覺的である。二つのものは、本質的に區別せられた内生活である。このことを注意するの

は重要である。實に吾々は之を通して、或る對象が外界に存在する故に、吾々が夫れを見るのであると言ふ考へ方が、單に、本末を顛倒したものであると言ふ一つの簡易なる確證を見出したのである。夫れは單なる記憶に過ぎないと言はれるかも知れないが、記憶であると言ふことから、何が記憶の本質であるにはしても、吾々の見るものは、視覺的なる意識の對象と成るものは、唯だ外界に存するものゝみであると言ふ主張は保證せられないのである。吾々の前には、謂ゆる『記憶せられた對象』は存在しないのである。否、何ものが存在しても、吾々はその時、固く目を閉ぢてゐるのである。

目を閉ぢて吾々の持つ、臚ろではあるが、本質的に、明かに視覺的なる心象は、耳を閉ぢて聽く聽覺心象と共に、既に夫れ／＼の作用の一つの方式である。若くは段階である。吾々は今まで單に視覺に就てのみ考へを進めて來たが、一つの美しい音に就ても、同じ様な考へ方を當嵌めることが出来る。吾々が一つの音を耳に聽くのは、その音としての意味、即ち聽覺性ヒコエルバアルカイトが、自ら意味することである。耳とは、かゝる聽覺の作用が、生理學的、物理學的立場から考へられたものである。

暗は、然らば、如何なるものであるか。右に言ふ様な特殊な視覺的表象の場であることに於ては、暗は、閉ぢられた目と全く同一である。然し、目を閉ぢるのは、吾々が意志を用ひて閉ぢるのである。夜の暗さは、吾々の意志を壓して、外から覆ひ懸るのである。かゝる暗さは、視覺性に對して如何なる關係を持つのであるか。

暗が來るのは、太陽が姿を隠すからであると考へられる。吾々が物を見るのは、自然科學の立場から見れば、確かに、太陽が世界を照らすからであると言ふべきであらう。太陽の光なき處には、色も無く、形も無いと言へるであらう。太陽の光なくして、目は何ものも見ることには出來ないと言はれるでもあらう。

光とは、然し、何ものであるか。吾々は一つの花を見る、その他無限に様々の形と色を見る。けれども、吾々の見るものは、單に、光に照されたものゝみであり、『照す光』と言ふものを見るのではない。太陽夫れ自身深い霧にでも覆はれない彼を見ることは、吾々の目には殆ど不可能であるが、吾々の見得る限りに於て、單に一つの、目の對象に過ぎない。單なる色と形である。それにも拘らず、太陽が、無限に多様な色と形の源泉であると考へられるのは、凡ゆる物の持つ色は太陽の光が反射せられたものである、太陽は凡ゆる色の寶庫であると考へられるのは、かく考へることによつて、無

限に多様な視覚上の事實が、矛盾なく統一せられると考へられるからでなければならぬ。視覚上の事實は、然し、どこまでも視覚的意識現象である。視覚の事實に統一があるとは、多様な視覚作用に統一があることである。種々なるものゝ明るい表面と影の部分の、無限に多様な關係、即ち明暗の對比に於ける、嚴密なる統一は、光線の直射を考へしめる最も有力な理由であらう。然し、明るく輝いた一枚の葉を見ることも、それと同様な輪廓を持つ影を他の表面に見出すことも、共に吾々の目の働きのである。種々なる對象の知覺が、同じ方向に同じ様に影を伴ふ、種々なるもの明暗の對比に明確なる統一があると言ふのは、明るきものと、暗きものとの見出し方に統一があることである。視覺性そのものゝ含む統一である。之を見られた對象そのものから言へば、一枚の葉とその影を結び付ける線の方向に、凡て他の對象の光と影を結び付ける線の方向が一致することであらう。この吾々の、先天的なる法則に據る、否、法則を含む、視覺作用が外界に投射せられて、物理學者の考へる『光線』が成立するのである。光は視覺作用の物理學的現象化に過ぎない。太陽は、外界に投射せられた視覺性である。否、視覺性の半面である。

けれども太陽は、單に光の根源として考へられるのみならず、同時に、熱の源として

も考へられてゐる。即ち、外界に投射せられた觸覺性である。太陽とは、かゝる、外界に投射せられた意味の結合である。太陽のみではない、一般に、意味の結合が外界に投射せられる時に、『物體』なるものが考へられるのである。一つの花を物體と考へるのはこの故である。花は視覺の對象であると同時に、觸覺の對象であり、嗅覺の對象であり、微かなる音に於ては、又、聽覺の對象である。之等の意味の現れが『外界に於て』結合せられて、花は一つの物體と考へられるのである。均しく視覺的意味の物體化であるが、視るもの、即ち視覺作用の物體化せられたものが太陽であり、視られたものとしての意味、即ち視覺の對象が物體化せられて、花と成り、無數の色と形を持つ物と成るのである。之等の物として考へられる種々の表象は、凡て吾が感官の表象である。吾が感官として作用する種々なる意味の現れである。種々なる意味を結合するものは意志、換言すれば『吾』である。夫れくゝの意味が肉體化せられて、夫れくゝの感官と成る様に、種々なる意味の統一者としての『吾』が物體化せられたものが、吾が身體である。

光の根源と考へられる太陽が、右に言つた様なものであるとすれば、太陽が現れな

いことである。と考へられる夜の暗さは如何なるものであるか。光が無いことであり、視覚が作用しないことであるか。けれどもその意味の半ばは、吾々は既に、目を閉ぢることに就て明かにした。この暗に就て、特に明かにすべきことは夫れが吾々の意志には拘らず、強壓的に眼界を覆ふことである。眼瞼ならざる何が眼界を遮るのであるか。

けれども吾々の考ふべきことは、吾々の意識的なる意志が、視覚作用に對して、本來如何なる影響を與へ得るかと言ふことである。目が開かれてゐる限り、如何に吾々が見ることを欲しないにはしても何ものかを見ない譯には行かない。如何に見やうと焦るにはしても、目を失つた人が手を以て見ることは出来ない。吾々の執意は之に關して全く無力なのである。吾々の意志が視覚作用に何等かの關係を持ち得るとすれば、夫れは唯だ、視覚作用に服従せんと執意する時のみである。

之に對して、吾々が執意によつて目を閉ぢるのは、確かに、屢々、見るに堪へない光景から避ける爲である。その時吾々の動作は多く反射的であり、殆ど夫れを避けやうとする意識さへも無い。けれども夫れは、例へば、道德的意識が夫れを見るに堪へないのであつて、純粹視覚作用が夫れに堪へないのではない。何となれば、目は、現にそ

の光景を見てしまつたのである。夫れは正しく、視覺がそれに堪へ得たことを證據立てるのである。純粹に視覺の立場から言へば、目を閉ぢるとは、光の世界から暗の世界へ、即ち知覺の世界から想像の世界へ、視覺の二大領域の一つから一つへ躍入することである。かゝる視覺の一つの領域が、單なる眼瞼の運動以上に成立することゝを語るのが、即ち夜の暗である。暗の世界は眼瞼が創造するのではない、暗と言ふ視覺の世界想像としての視覺作用の視野として、現れた視覺性である。無限なる暗の視野とは、かゝる視覺の世界に於て、輝く太陽に對應するもの、即ち視覺作用の一面として、視覺の對象化せられたものである。この意味が現れる故に、眼瞼は、單に肉眼の防禦である外に、暗を用意する維としての意味を含んで來るのである。風に翻る袂もこの意味を持つ、暗の一つの方式である。夜の暗さは他の一方式である。朝と暮との黄昏は、この意味に於て、視覺の二大領域の中間に立つ段階である。ブン・アイク、レオナルドオなどが、繪畫に於ける光と暗を見出したと言はれる様に、太陽と、人間の智識が見出した種々の光源が發する光と、無限なる夜の暗との對立を、わが中に包む視覺性である。

之等凡ての方式を總括しての『暗』のみが、明かな知覺の、即ち明晰な色と形の世界としての視覺の領域に對立するものゝ凡ては、濃霧の如き『水氣』と、『空氣』を總括しての『晝の維』は、他の一である。たゞ暗の黑色に對して、言はゞ白色の『見えないこと』の領域である。漲る日光は他の一である、黃の領域に於ける見えないことである。急激なる運動は更に他の一である。

凡て之等の特殊なる視覺の方式を嘗てエルフリンが用ひた様な、非明瞭性ウンラナルハイトと言ふ語に總括して、さて吾々は、何故に、夫れをこの様な、物を見ないと、言ふ意味に於て考へるのであらう。漲る日光も、水氣も、暗も、凡て確かに、或る視覺的對象である。吾々はその孰れにも、夫れ、特有の視覺的意識を持つのである。夫れにも拘らず、見えなると言ひ、不明瞭であると言ふのは、普通の立場から言へば、凡てその自然の障屏の背後に、種々なる物象が存在することを豫期し、さうして夫れが、夜が明ける時、若くは霧が晴れる時、常に事實と成て現れるからである。けれども夫れは、純粹に視覺的なる立場から見ると、正しい物の言ひ方ではない。若し、現に見るものゝ『背後』に、他のものを考へて、夫れが見えない故にのみ、現に何も見ないと、言ひ得るならば、目が物

を見る時は永久に來ないであらう。

純粹視覺の立場に於て、暗と言ひ見えないと言ひ、又之を不明瞭であると言ふのは、背後に物を考へるのではなく、物の差別を見ないこと、種々なる物の、色と形の差別を見ないことを言ふのである。視覺的世界に於ける『無限性』である。(終)